

「民芸運動における寿岳文章先生の貢献」

関西学院大学教授 神田 健次

はじめに

関西学院大学神学部の教師をしています神田健次です。

趣旨をおうかがいして大切なことだなと思いました。大変尊敬している寿岳先生ですので、私は民芸運動を中心にずっとやってきたわけでは必ずしもないのですが、研究のつながりでここ 20 年間、いろいろな所を歩き、日本民藝館など見学させていただき教えていただきながら考えたことをお話しします。

私の問題意識は、戦後に出た『民藝』で、仏教的視点からの柳さん（柳宗悦）の特集をやっています、大変感動いたしました。それは非常に大切な視点であると思っています。ただ、私の視点は、白樺派の流れ、その前から柳さんのお仕事をたどっていて、どうもキリスト教の色彩が非常に強いのです。特に内村鑑三からの影響ですね。志賀直哉、有島武郎もそうですが、そういうつながりの中で、あとでみんな離れていくわけですが、柳さんだけが、同人誌『白樺』創刊号に神学論文を書くのです。独学で当時の欧米のキリスト教資料を駆使して神学論文を書くという、記念すべき第一号です。これが後のブレイク研究、宗教哲学の三部作あるいは四部作の非常に重要な視点になっていると思います。中世の神秘主義に傾倒していきませんが、もちろん仏教的な視点もありますが、どちらかというと、初期は『工芸の道』に至るまでは、キリスト教の色彩が非常に強いのです。それが、私の基本的なテーゼです。

なぜそのことにこだわるかという、よし悪しは別にして、民芸運動の展開の中にキリスト教関係者がけっこう多い。倉敷民藝館の初代館長の外村吉之介先生は、実は関学の神学部の大先輩で、最初京都のYMCAの主事をされていて、そこで関東大震災で京都に来られた柳先生と出会って、牧師になる決意ができたのです。これは通常あり得ないことです。或いは大原親子（大原孫三郎、大原総一郎）、ICUの初代学長、湯浅八郎、朝鮮の工芸を柳さんに教えた浅川伯教・巧兄弟も、型染版画で世界的に著名な渡辺禎雄もキリスト者であり、どうも仏教的なイメージよりも初期から見ると、キリスト教的な色彩が強いのです。とくに柳さんが京都に来られてから、同志社との関わりで村岡景夫、同志社の神学部教授だったのですが、〈こぎん〉の研究で有名な方ですが、そういった人達がなぜ運動に参加していったのか、これを解くためにやはり柳先生の、その歩みの中で、なぜそこに惹きつけられていったのかを見ていくのが、私の関心なのです。

私の出身地は新潟県の新発田市で、熱心な浄土真宗の地ですが、信仰の構造が浄土真宗とキリスト教は似ているところがあり、柳さんがシフトしたのはそんなに不思議ではないと、そういう一つの考え方をもっています。今の時代に宗教は対立しあうものでなく、共存し対話しながら、新しい課題、平和の課題などのチャレンジを受けて共に担っていけるということで、私は他の宗教者との学会をつくらしたりして、そういう問題意識でやらせていただいています。

キリスト教との関わりで、私は実は今、寿岳先生と「対話」をしています。中世最大の詩人ダンテの『神曲』の翻訳をされていますが、実はその前に文部省が 25 年ほどかけて『キリスト教用語

辞典』というのを編纂しているのですが、関学、同志社、神戸女学院のキリスト教関係の専門家が集まって編纂に関わっています。そこに唯一キリスト者でない人で、大きな貢献をされたのが寿岳先生です。それがあったから、ダンテの『神曲』を深く読みこみ訳すことが出来たということも書いておられます。もともとは真言宗高野派の出ゆえでしょうか、根底には仏教的なものが流れていると思います。関学に来られて、キリスト教との関わりの中で、やはり対話的な、そういう意味で柳さんの宗教哲学の『宗教とその眞理』、これが寿岳先生にとって一番影響を受けた書と言えます。キリスト教と仏教との非常に深い内面的な対話を試みた柳さんの宗教論に出会ったことが、非常に大きかったのではと思います。

ここで寿岳先生の宗教論について話すつもりはないのですが、私の問題意識との関係で、24、5年前に関学の百年史を編纂するという大きなプロジェクトに入れていただいた時、関学で百年間に関わってきた人達の一次資料がたくさん出てきまして、そんな中に寿岳先生はいかに凄いかということ、ほんとに今でも思っています。寿岳先生評価を関学の中でしっかりしないといけないという、これが私の使命です。

寿岳先生との関係で柳さんも三年ほど関学へ教えに来ておられましたが、柳・寿岳・外村この3人との関係で、実は、2010年11月に大学の図書館の時計台で、展示と講演会を企画しました。今回お話がありました時に、ここは是非とも市をあげて、あるいは市民の関心のある者がやはり保存しなければいけない、そのためには業績を学ばせていただいて、文化財として守っていかないと心からそう思いました。

寿岳先生は英文学者としてもいろいろなことで優れておられるのですが、特に惹かれるのは、人間として、根底に平和への思い、一人の人間の尊厳というものに対しても、非常に偏見にとらわれない目でみつめてきちっと評価していく、本物は何といっても凄いという姿勢、そういうものが社会を、歴史を変えていく、そういうことを教えられて来ているのです。だから単にきれいだとか、ちょっと趣味的にとか、そういうものもありますが、やはり入れば入るほど、根底にそういうものがあり、今のグローバルな何が何だかわからなくなっているというような時代の中でも大きな意味をもっていると思います。

この『工藝』ですね。すばらしい、大変美しいですが、なかなか手に入りにくいところを、大学図書館で全巻120冊を入手でき、これを記念して6年前ですが、先ほどの三人の方について記念の講演会をさせていただきました。そうしたら兵庫民藝協会が全面的にバックアップしてくださり、大阪・京都からも来ていただいて、いろいろなことを教えていただきました。あらためて感謝をいたしたいと思います。まあ寿岳先生が導いて下さったという思いを感じています。とくに後でふれますが、日本民藝協会が分裂していきますね、日本民芸協団として。そういう不幸な歴史があって、それ以降一緒に同席していないのですが、この時にたまたま同席して下さったのです。これはほんとに寿岳先生が導いて下さったものと感動的でした。

さて、ここで基本文献表(註1)を見ていただきます。13番がこの間の講演をさせていただいた時のものです。図書館資料があるかと思しますので、希望の方は大学図書館あるいはインターネットでダウンロードできます。12番は、その9年前に時計台の歴史編纂室の責任者をしておりました際に、「知られざる学院史の一齣—民芸運動との関わりをめぐって」という論文を、民芸運動と関学がいかに深い関わりがあるかということを書きましたら、図書館の山崎さんが評価して下さり、こ

ういう大学図書館のプロジェクトに入れてくださったのです。今日お話することは、この2つの論文をベースにしていることをご理解いただきたいと思います。

4つの柱でお話いたしたいと思います。

- [1] 関西学院と寿岳文章
- [2] 民芸運動における指導的役割
- [3] 書物の工藝
- [4] 和紙の研究

この4つの柱で、『工藝』の一次資料からコピーさせていただいて、テキストをつくり、そこからいくつかピックアップしたものを用意させていただきました。

[1] 関西学院と寿岳文章

寿岳先生は、1900年に明石の真言宗のお寺の住職の息子さんとして誕生され、いろいろな経緯があって、1919年に、関学高等部英文学科に入学されます。この時決定的出会いを経験するのですが、その時の英文科の学生二人が寿岳先生と岩橋武夫さんです。岩橋さんはご存じのように、視覚障害になられて、当時関学は全国で唯一、視覚障害者に門戸を開いていて、関学に来られました。後にエジンバラに留学、ミルトンの研究で英文学教授にまでなられました。その学生だった時にサポート役の妹（静子）さんがおられて、その方が寿岳先生のパートナーになられました。ほんとにすごい出会いがあったのです。

人権感覚ということではほんとに身近に、そういう出会いのなかで、寿岳先生ご夫妻は非常にシャープなものをお持ちになっていた。ご存じのように、岩橋先生はヘレン・ケラーと大変親しく、日本に度々呼びになり、大阪に視覚障害者の生活のサポートの拠点をつくられたのです。

英文学の業績としては、出発点の一つはブレイク研究でした。1952年には京都大学より文学博士の学位をうけます。そして、受賞されたダンテの『神曲』ですが、実は岩波文庫で山川丙三郎訳が出ていまして、寿岳先生は文語訳としてはこれ以上の訳はないと、大変評価されていますが、現代の人に読んでもらうために新しい口語訳をされたのです。ほんとに素晴らしい翻訳です。

寿岳先生は、1932年に関学専門部文学部の講師に招かれます。2年後に大学に認可されて、法文学部文学科英文学講師として専任となり、のち文学科教授となっていけます。ここで興味深いのは、戦時下どうしておられたかということです。基本文献にあげました5番の『寿岳文章書物論集成』という大きな本があります。ありとあらゆる業績がそこに詰まっています。その中に「私の戦中戦後」という文章を書いておられます。その中から紹介します。

戦時下となると、配属将校が学内に常駐し、軍事訓練などがある中、時間割とか大変な苦勞をされるわけですが、時間配分をめぐって、許されるころまで学生本位に闘っていかれるので、学内でも睨まれているのです。勤労働員や護国神社の清掃をやっているのですが、そういう時にぶらっと学生たちを奈良の法隆寺に連れて行きます。法隆寺がいかに美しいか、いかに素晴らしいものであるか、学生にそこで講義するのです。だからぎりぎりのところで、日本文化について戦時下の学生たちに何を伝えたいか、ということで闘っておられた熱意が伝わってくるころです。

もう一つ、戦後の話ですが、関西学院が60周年を迎えたときの1949年ですが、新しい校歌が必

要ということで、英語で“A Song for Kwanseï ”という関学の歌があります。古い歴史をもつ関学のグリークラブが演奏会を開いたときは必ず、“A Song for Kwanseï ”を歌うのです。美しい素晴らしい英語の歌詞で、関学出身の山田耕筰さん作曲で、エドモンド・ブランデンという人が作詞したものです。このブランデンは当時イギリスを代表する詩人でありましたが、そのブランデンが東京大学で特別レクチャーのために招かれて来たのです。たいへんな評判になって、みんな何とか自分の大学の校歌を作ってもらいたいと考えていたのですが、なかなか叶わなかったのです。ところが2校だけ叶えられて、東は東京女子大学でした。なぜならあそこは斉藤勇先生という高名な英文学者がおられたのです。西はこの関学に作っていただいたのです。それは次のような、ひとえに寿岳先生のおかげであったのです。

寿岳先生が英文学者として偉かったということもありますが、むしろ、1940年、1941年ころの戦争に突入していく時代に、英米の外国人や宣教師たちも皆母国へ帰国し始めます。その前からだんだん英米人に対する風当たりが厳しくなり、親しかった人達もみな離れていきます。ところが寿岳先生だけは、外交官だったジョン・ピルチャー氏に対して、最後まで友人として心を許していました。ピルチャー氏は寿岳先生ご一家の心に深く感じいったのです。英国へ帰るのですが、戦後、英国を代表する外交の要として（後に英国駐日大使）再び来日します。東京からすぐ、まっすぐに向日町に来られたのです。寿岳邸を訪ねた時、寿岳夫妻が紙漉で和紙をつくり、苛酷な戦争中もずっと書物を作っておられたという、その姿をピルチャー氏が見て、涙を流して抱き合ったというのです。「あなたの所へもうすぐブランデンという英国を代表する詩人を送ります。信頼できる人です。よろしく頼む。」と紹介されます。

関学の校歌は、ブランデンが、寿岳先生を通してわざわざ西宮まで来て、1週間滞在して、風を感じたり、いろんな空気を感じ、校風を感じたりして、そうやって作り上げた、“A Song for Kwanseï ”です。僕らにとっては大切な名曲なのです。一度何かの機会に聞いていただければと思います。ほとんどの関学の人、なぜその歌が出来たのか知らないのです。寿岳先生がいて、平和への祈りというものが深く込められた歌なのです。学校の関係で、寿岳先生のそういう一面をご紹介します。

[2] 民芸運動における指導的役割

日本の民芸運動における、特に京都の民藝協会のなかでの寿岳先生の指導的役割は申すまでもありません。中には民芸運動について初めてという方もいらっしゃるかも知れませんので、お手許の資料を見て下さい。「日本民藝美術館設立趣意書」というものです。柳宗悦、富本憲吉、河井寛次郎、濱田庄司の4名で趣旨を書いています。最後のくだりー

「民藝の美には自然の美が生き國民の生命が映る。而も工藝の美は親しさの美であり潤ひの美である。凡てが作爲に傷つき病弱に流れ情愛が溷死して來た今日、吾々は再び是等の正しい美を味ふ事に、感激を覺えないであらうか。美が自然から發する時、美が民衆に交わる時、そうしてそれが日常の友となる時、それを正しい時代であると誰か云ひ得ないであらう。私たちは過去に於てそれがあつた事を示し、未來に於てもあり得べき事を示す爲に、此「日本民藝美術館」の仕事を出發させる。」

（『柳宗悦全集著作篇第十六卷』「日本民藝美術館設立趣意書」より）

1981(大正15)年の設立です。英語で フォーク・アート、民衆的工芸、柳さん達の造語ですね。貴族的工芸ということの対比でこれをオフィシャルな形で提示したわけです。

その後しばらくして『工藝』という雑誌を創刊します。和紙で作ってあり全国各地の民芸を紹介し、800部くらいの手刷りです。刊行の趣意が参考資料「雑誌『工藝』刊行趣意」(『柳宗悦全集 著作篇第二十卷』)にあります。民芸運動の機関誌と同時にこれ自体が作品となるような、日本に残っている中でもっとも美しい雑誌といっても過言ではないかと思えます。一冊一冊が作品で、そこにもものすごいエネルギーを使っているわけです。もう一つ柳さんの文章を紹介します。次のページの「民藝とは何か」をご覧ください。

「工藝品とは実用品である。さし當り此の簡単な定義で充分である。私達は此の内容から色々なものを導き出す事が出来る。工藝の概念には「用」と云ふ事が要である。用を離れて工藝はない。それなら物は用を去るにつれて工藝の意味を失ってくる。用への無視はやがて工藝への無視である。それ故こうも云へよう、用に近づけば近づく程工藝の意義を完ふしてくると。用に即する事が工藝の生命である。」(『工藝』第1号 柳宗悦「民藝とは何か」抜粋)

非常に簡潔に用の美とよばれる民芸の中核をなすコンセプトについて『工藝』の第1号で書いているのです。

寿岳さんは柳さんと最初どこで出会っているのか、その辺のところを申し上げます。1922年、震災の前の年、関学の学生だった時に卒業論文でブレイクを取り上げていますが、東京の柳さんがその研究をしているということで、東京の柳さんを訪問したのが最初の出会いといわれています。『宗教とその真理』というのが、寿岳さんが最も感銘を受けた書物です。宗教哲学の三部作のひとつでたいへん優れた書ですが、読み解くのが難しい書です。

そして1924年に、関東大震災で京都に引っ越してきた柳さんとの本格的な交流が始まります。そして共同の雑誌『ブレイクとホキットマン』(1931年)を出します。あまり長く続かなかったのですが、寿岳さんの最初の本作りの原点になるような雑誌を柳さんと一緒に作っています。柳さんは『工藝』が出たその年に、二つの雑誌を創刊したことになります。しかも和紙を使って、これ自体『工藝』とクオリティーが似て、質の高い、工芸品として価値がある、書物工芸の原点といえるべきものを柳さんと共同で出したのです。

もう一つ、先ほど少し触れましたが、やはり寿岳さんが柳さんによって最も心を動かされているのは、平和の思想ですね。非戦思想です。戦争の足音が近づいてくるような時代に、朝鮮との関わり、あるいは沖縄との関わりを含めて平和思想が一貫しています。普通ならいわゆる骨董的な物、刀の鏝みみたいな物が入るのですが、そういう物は絶対に集めない、そこが凄いと書いているのです。そこがなければこんなに大きな影響を与えてこなかった。現代でも最も大切なことだと思っています。

民芸運動の役割の中では、寿岳さんは『工藝』の同人として編集にも関わっていきます。それから式場隆三郎さんなどの『月刊民藝』の同人にもなり、その中で和紙の特集号がいくつかあります。『工藝』28号(1933年4月)、59号(1935年11月)、『月刊民藝』では31号(1941年11月)、こう

いうあたりは寿岳さんが特に力を入れておられた特集です。

民芸運動で忘れることが出来ないのは「和解のはたらき」です。戦後の民芸運動のなかで、一貫して指導的役割を果たしてこられた大阪の三宅忠一さんですね、いろんな面でカリスマ的な方で、大きな貢献をされた方ですが、この方が大阪に「日本工芸館」を作られました。寿岳さんは分裂した時のことも書いておられますが、とても痛みになって、自分も辞任するとまでいわれていたのですが、組織内に踏みとどまって欲しいと言われたのです。三宅さんは、本来無名の職人の技である民芸から、いろんな著名な方が活躍していくのは矛盾しているのではないかと、今でも無名の個人作家といわゆる有名人のような、民芸の本来もっていたその関係がいったいどうなるのか、ということで三宅さんは柳さんと論争して別れていったのです。

寿岳先生は厳格で厳しい人ですから、私はかなり三宅さんに近いような立場を感じておられたのではないかと思います。その意味で別れた方の理事長を引き受けられた。ただ、別の側面からいうと、柳さんと寿岳さんは二人三脚的な間柄であるわけです。生涯そうですね。『柳宗悦と共に』という本があるくらいですから、やはりどこかで、時間が経てば和解して欲しいと、柳さんだったら理解されると、そういう和解を祈ってしんどい立場を引き受けられたのではないかと、これは私の、いろんな資料を読ませていただいた上での感想です。

こうして1959年に「日本民芸協団」ができるわけです。先ほど申しました関学で2010年の催しをやらせていただいた時に、民芸協団の方が何人かいらして下さって、分裂してから初めてそこに同席して下さった。寿岳先生が導いて下さったという思いを深くした次第です。

[3] 書物の工藝

資料の「ケルムスコット・プレス設立の目的に付て」(寿岳文章訳)をご覧ください。これは『工藝』の44号(1934年)のところにしている、ウィリアム・モリスの有名な「ケルムスコット・プレス」です。すなわちモリスの理想の書物を生みだしていくプレスです。今またモリスブームですね。美術館が若い人でいっぱいなんです。静かにそういう民芸が若い世代に響いているものがあると思います。新しい民芸運動の世代交代の課題を考える時に、そういう若い世代が生まれて来ていることをどう繋げるか、一つの課題になっていると思います。そういう意味で、私個人は何も出来ませんが、大学みたいところがジョイントしていくと、もう少し民芸運動の広がりが出てくる。関西学院や甲南大学など寿岳先生つながりで、もう少し連携していけばいいのではないかと思います。

このモリスやラスキンについては、柳さんは『工藝の道』でこの二人を論じているのですが、二人ともオックスフォード大学で学び、研究所があります。二人ともキリスト教に深い関わりをもっています。モリスはオックスフォードの神学生であって、しかもキリスト教社会主義という賀川豊彦さんらに大きな影響を与えたそういうムーブメントを、モリスはある意味ではもっとラディカルなところがあります。ラスキン、モリスはベースは、宗教的なキリスト教的な社会主義、社会思想—社会を急激にではなく、ゆるやかに変えていく、そういう思想に、友愛とかですね、柳さんは民芸運動の基礎的なものとして、協団という考え方にインスパイアされているのではないかと思います。オックスフォードで研究が盛んで、日本でも紹介されたりしてきているわけです。

基本文献の方にある「書物工藝家としてのモリス」、これは『モリス記念論集』という戦前に編まれた本ですが、ここに本格的な寿岳さんのモリス論が出ています。ケルムスコット・プレスは「ケ

「ケルムスコット・プレス設立の目的に付て」で、モリスが最初に述べています。

「私が書物の印刷にこころざしたのは、美しさへのはっきりした要求を持つと同時に、読みやすくて眼をちらつかせず、また殊更に風變りな字形によって讀者の頭腦を亂すことのない書物を作る爲である。」「十五世紀の書物と言へば、よく其れらの多くを惜し氣なく飾ってゐる・・・」(『ウィリアム・モリス』寿岳文章訳「ケルムスコット・プレス設立の目的に付て」抜粋)

15世紀に印刷機が出来てから、百年くらいは美しい書物が出来た。モリスはそれを19世紀の時代にリバイバルしようとした。そして寿岳さんもそれを模範にして、日本の材質を使って、美しい書物を目指された。これは翻訳ですが、非常に大切に、ご自宅で向日庵を開かれたモデルは、モリスのこの「ケルムスコット・プレス設立の目的に付て」だったのです。

去年(2015年)、関学で博物館(時計台の二階)が開設されたとき、最初の展示を企画させていただきました。その中に関学が持っている聖書の展示、これ現物の写真ですが、グーテンベルクの『四十二行聖書』(たまたま私が学部長の時に京都の古書店で見つけ買っていただきました。)これを今持っているのは、慶応大学、天理大学などで、持っているとい国際的なネットワークで紹介されます。そうしたら関学の図書館が世界のネットワークに載ったので、嬉しくなりましたね。他に『死海文書』とか、特別の展示の時ですが、いろいろな機会に展示したいと思っています。『四十二行聖書』、これはほんとに美しいですよ。こういういいものを集め始めています。ミッション・スクールは意外に所蔵していないのですが、天理大学などは凄いですね。

やはり寿岳先生はこういうものを色々な形で見てこられて、変に飾らない、しかし手に取るだけで美しい、こういうものを目指して向日庵を作られた。やはりモデルがあるのです。ああいう本を作りたいと。これは、印刷技術が生まれた時の代表的な書物です。これから百年間、一番最初の頃のものには本当に美しいです。

柳さんもやはり白樺派時代は、キリスト教の色々なことを紹介しているのですが、書物というものがどういうものか、寿岳さんと深いところで共鳴していたと思います。柳さんの中世のキリスト教主義への造詣の深さはものすごいものです。そして、それと呼応するかのように、寿岳さんもダンテの『神曲』に至る、中世の最高のキリスト教文学でしょう、だから単に仏教的に優れた見識を持っておられただけでなく、キリスト教に対する造形の深さは、神学者も驚くほどでした。そこがすごいです。

「装幀論」ですが、資料をご覧ください。客と主人との対話方式になっています。

「装幀を支配する原理は何か。」「用と美だ。今も言った通、書物は手に取りあげられ、眼で讀まれる。取りあげる手と見る眼とはすでに用と美との世界の住人である。書物の工藝性はここから出發する。」「書物では用と美とどちらが大切か。」「用が大切だ。美は他の工藝の場合に於ける如く、寧ろ用に内在し、用から顯現すると言ってもよいだろう。」(『工藝』44号)寿岳文章「装幀論」抜粋)

美が大切だというのではなく、用に内在しその中から顯現する。対話形式でわかりやすく書かれ

ています。用の美が書物工芸における基本的なコンセプトになっています。

それから向日庵本のことですが、1932(昭和 7)年、32 歳の時ですが、『向日庵発願記』を書いています。この時から、ご自宅で奥様と二人三脚で、すべてをささげて、向日庵本に取り組みます。資料にあります(註2)、これは最初にご紹介した『寿岳文章書物論集成』からコピーしたのですが、向日庵で生まれた書物を挙げています。最初はウィリアム・ブレイクのもですね。それから『向日庵消息』第一信から第十信まで、これはとても面白いものです。寿岳先生が日々どういうことを考えていられたのかがわかります。

それから式場隆三郎さんの訳した本『テオ・ファン・ホッホの手紙』、もともとの本は向日庵で作った本です。深い交流があった方です。

『書物』も評価が高いです。『絵本どんきほうて』は向日庵の一つの傑作です。そしてもう一つの代表作『紙漉村旅日記』、これは昭和 18 年 9 月に出されて、戦争に突入したただ中で完成しています。

その他に編纂本として『ブレイクとホキットマン』とか『和紙研究』。和紙研究は非常に重要で、寿岳先生は世界的なオーソリティーと言えます。

[4] 和紙の研究

最後に和紙論ですが、資料の「和紙復興」をご覧ください。

「舊来の和紙は、今私達をかこむ西洋紙の洪水に押し流されようとしてゐるが、品質の上から言へば、西洋紙と比較にもならぬほど立派なものである。すぐれた製紙材料にめぐまれてゐるわが國の風土は、おのづと優秀な紙を作り出した。日本の用紙製造業者は外國でも上質の印刷用紙には常に日本の手漉紙が用ゐられてゐると云ふ事實を知らないのか。國家外交の文書などでも、恒久の保存には日本の鳥の子が最も適當とされてゐる事實を知らないのか。」(『工藝』28号、寿岳文章「和紙復興」抜粋)

洋紙だと大体百年くらい、和紙だと千年くらい持つと言われていました。今は西洋でも和紙の評価が非常に高いですが、そういうベースを寿岳さんは作って来られた。

「漉場紀行」という資料があります(基本文献9)。帝国学士院の推薦で、有栖川宮奨学金を受けて、1937(昭和 12)年より 3 年間、日本の手漉紙業の各地を歴訪する旅を行います。これは 1945 年の本で、神田の神保町で見つけました。芹澤銈介さんの表紙で、寿岳さんの名前がでている『紙漉村旅日記』です。とっても美しいですね、全部和紙でできています。訪れた各県一つ一つの紙漉場が出ていて写真がとってあります。数ページにわたって各地域の和紙の見本が入っています。1943(昭和 18)年に向日庵で出したものを、もう少し補充して 1945 年に出した初版です。ちょっと貴重なものです。

民俗学で有名な宮本常一先生が、これはフィールドワークのモデルだ、フィールドスタディの模範だとも、それくらい高い評価を与えられています。戦時中で、たぶん紙漉場どころではない筈です。でもこのままでは、そういうものが滅びていくのではという危機感があったと思います。そういう中で、不便なところへ、ほんとに大変な旅であったと想像できます。和紙を守ることが、「平和

の証し」なのだと、そういうミッションが先生を動かしていたのだと思います。
これで終わります。ご清聴をありがとうございました。

註1 <基本文献>

1. 柳宗悦との共著『ブレイクとホキットマン』（同文館 1931年）
2. 『紙漉村旅日記』（明治書房 1945年）
3. 寿岳文章『柳宗悦と共に』（集英社 1980年）
4. 『寿岳文章書物論集成』（沖積舎 1989年）
5. ウィリアム・モリス（寿岳文章訳）「ケルムスコット・プレス設立の目的に付て」（『工藝』第44号）
6. 「書物工藝家としてのモリス」（『モリス記念論集』川瀬日進堂書店 1996年 復刻）
7. 「装幀論」（『工藝』第44号 1934年8月）
8. 「和紙復興」（『工藝』第28号 1933年4月）
9. 「漉場紀行（一）」（『工藝』第87号 1938年4月）
10. 「民芸運動と和紙」（『民藝』254号 1974年2月）
11. 神田健次「初期柳宗悦における宗教論と民芸論」（『基督教論集』第44号 2001年3月）
12. 神田健次「知られざる学院史の一齣一民芸運動との関わりをめぐって」（『関西学院史紀要』第七号 2001年3月）
13. 神田健次「民芸運動と関西学院—雑誌『工藝』を中心に」（『時計台』（大学図書館 2010年4月）

註2

向日庵本

- 唯理神之書 キリヤム・ブレイク著[複製・訳] 昭和7年4月
無染の歌 キリヤム・ブレイク著[複製・訳] 昭和8年2月
セルの書 キリヤム・ブレイク著[複製・訳] 昭和8年10月
* 向日庵消息（第一信～第十信） 昭和8年6月～昭和18年8月
Exoteric Writings of William Blake [編] 昭和8年12月
テオ・ファン・ホッホの手紙 式場隆三郎訳 昭和9年8月
Letter from Shimane and Kyushu by Lafcadio Hearn 昭和9年10月
無明の歌 キリヤム・ブレイク著[複製・訳] 昭和10年3月
詩集 願はくは 野田理一著 昭和10年7月
書物 昭和11年3月
絵本どんきほうて 芹澤銈介 昭和11年10月
永遠の福音 キリヤム・ブレイク著 [訳] 昭和13年5月
和紙景観 昭和14年7月

The Art of Paper Making in Japan by Richard Tracy Steven

[複製] 昭和 18 年 2 月

紙漉村旅日記 寿岳文章・静子共著 昭和 18 年 9 月

A Bibliography of Ralph Waldo Emerson in Japan from 1878 to 1935 by Bunsho Jugaku

昭和 22 年 12 月

* *Eastward: A Selection of Verses Original and Translated* by Edmund Blunden ブランデン
詩集刊行会発行 昭和 24 年 12 月

In Memoriam Harold Frederick Woodsworth D.D. 昭和 27 年 5 月

* *The Year of Monkey* by D. J. Enright 甲南大学理事会発行 昭和 31 年 4 月

編纂本

* ブレイクとホキットマン 柳宗悦と共編 第一巻 I—XII 昭和 6 年 1 月—12 月
第二巻 I—XII 昭和 7 年 1 月—12 月

* みおつくし ぐろりあ そさえて発行 創刊号・昭和 4 年 二号・昭和 5 年

* 和紙研究 和紙研究会発行 昭和 14 年 1 月—54 年 12 月

* 和紙談叢 1 和紙研究会発行 昭和 12 年 2 月 1 号のみで終わった

* 印は向日庵本ではないが、先生が編集に携われた準向日庵本である。

註 3 『工藝』 87 号、寿岳文章「漉場紀行」